

サイコロ

ISHIKAWA MERIYASU MAGAZINE

Special Feature

“ 産地が誇れる軍手を創る ”



Column

私と石川メリヤス

News

新製品「魚さばき手袋」を発売中です



1.

日本製高級デニムの様な 産地が誇る軍手を創る

使い捨てではなく、愛着がわいて何度でも洗って使い続けたいと思える軍手を開発する——。石川メリヤスがこんな決意をしたのは今年初めのことです。10年以上前から「このままでは三河が作業用手袋（以下、軍手）の産地ではなくなってしまう」という危機感を持ち続けてきました。

石川メリヤスがある愛知県三河地方は「特紡糸」と呼ばれる糸の産地です。明治40年から続く産業で、日本における繊維リサイクル業の元祖と言えます。

今、この特紡糸が絶滅の危機に瀕しています。1990年以降は廃業のスピードが加速しており、三河地方で残る特紡企業は3社ほどです。

廃業の最大の要因は、特紡の価値が見出されていないことです。特紡糸は、戦後繊維産業が活況だった頃に、市場に出せない「B格」と格付けされたワタを糸に紡ぎ、軍手などの原料にして発展した経緯があります。不揃いなB格の原料を人間の知恵と技術で補ってきたのです。

もともと原料がB格であるから、安かろう、悪かろうというイメージが業界内には強く残っています。また、軍手と言えば使い捨ての実用材であり、実際に薄利多売です。

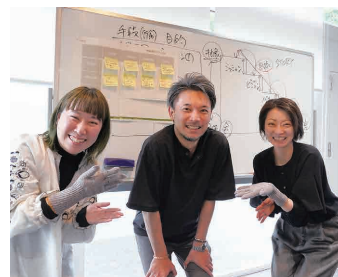
1957年創業の石川メリヤスはこのようなイメージに抗い、特紡糸のポテンシャルを引き出すものづくりを心掛けてきました。ボリューム感があり、ふんわりと着け心地のいい「サイコロ印」のオリジナル軍手は石川メリヤスの揺る



2.



3.



4.

ぎない原点です。ただし、サイコロ印もやはりプロ向けの実用材であり、「愛着がわいて何度でも洗って使い続けたいと思える軍手」にはなっていません。

大量生産の糸では出せない独特な風合い。特紡糸を使った軍手を改めて見直したとき、私たちの頭に浮かんだのは高級ゾーンの日本製デニムです。これらのデニムで使われる糸と特紡糸には「リング精紡式」という紡績工程の共通点があります。「空気精紡式」と比べ、生産効率が低くて糸にムラが出るのが特徴です。このムラこそが特紡糸のポテンシャルであり、独特な風合いのある軍手は高級デニムに匹敵する価値を持てるかもしれません。

そのためにはデザインの力が必要です。担当するロジックプロディーナの久保田千絵さんは、三河地方の西尾

1. 生地にポリウレタンを編み込みフィット感と保温性を高めて機能性を向上させた「三河軍手[®]」
7色のカラーネップ糸を使うことで選ぶ楽しさとアナログ感を出している。
2. 「ロジエプロディーナ」のパリでのファッションショーの様子
久保田さんは、機能性とストーリー性の観点から、素材のポテンシャルを最大限引き出すことがデザインだと考えている。
3. 贈り物にもできる実用品を目指した商品
軍手の特徴である手首のオーバーロックはサイズ別のバイカラー。豊かな色彩を楽しめる。「ハンカチ以上、ネクタイ未満」の関係性の相手に贈れる商品を目指した。
4. 「三河軍手[®]」のブランディングについて
ご指導いただいた中村彰収さんを囲んで
中村さんは西尾市の公的ビジネス支援機関「ニコラボ」のチーフコンサルタントです。左が久保田さん、右が石川メリヤス社長の犬宮。

市で育ち、東京でファッションブランドを立ち上げてデザイナーとして活動したのち、6年前に地元へ戻りました。現在「ハレの日の装い」を主軸とし、ウェディングドレスなどのデザインを手掛けています。

これまで2,000種以上の軍手を作り続けてきた石川メリヤスの経験に、グローバルに活動する久保田さんの知見を加え、新たな軍手を作り出しました。軍手＝白色の既成概念を打ち破ったカラフルで温かみのある軍手です。実用品としてだけでなく、贈答品としての価値を見出せる仕上がりとなりました。そして、かつて下等なものとなされた「B格」という言葉を前向きに再定義し、「三河軍手[®]」と名付けました。日本製デニムのように、産地が誇れる商品に育てていくつもりです。

私と 石川メリヤス

1962年設立（創業は1957年）の石川メリヤスは2022年に設立60周年を迎えました。長くお世話になってきた方にお話を伺うシリーズの第7回は、マルトラ別館で料理長を務める石川圭一さん。石川メリヤスは創業者から3代に渡り、取引先との宴会や社内の新年会でお世話になっています。

白浜保育園から吉良中学校まで、御社の犬宮社長とは12年間ずっと同級生でした。お互い祖父の代からの縁です。この「私と石川メリヤス」史上で、一番お世話になっているのは私だと断言できます（笑）。

そして、今後も石川メリヤスの業績が伸びていくことを心から願っています。盛大な忘年会も和やかな新年会も、ある程度のゆとりがある会社でないと開けないからです。私は選りすぐりの地魚を精一杯に料理します。明日への英気を養う一助にしてください。つまり、御社とマルトラ別館は一蓮托生なのです。

石川進さん（石川メリヤス創業者）には強烈な思い出があります。苦潮（青潮。酸素濃度に乏しい海水で魚が酸欠状態になる）のときに海からザバツと上がって来て、腕に抱えた木樽の中にアイナメが20本ぐらい入っていました。海中の岩場で手づかみしたのでしょう。私は「魚をたくさん獲る人が偉い」という価値観があるので、びっくりして尊敬の念を深めました。

進さんは豪快な方で、マルトラ別館では芸者さんをたくさん集めた宴会を開いてくれていました。芸者遊びなどは失われつつある大人の文化ですが、マルトラ別館では大事に引き継ぎたいと思っています。今年もご来館をお待ちしています。



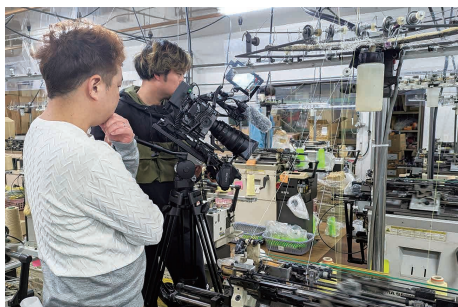
40歳を過ぎてから「本当のいいもの」や「幸せとは何か」がやっとわかってきたと語る石川さん。曾祖父の秋太郎さんとマルトラ別館にちなみ、長男の名前は虎太郎^{こたろう}くんです。

News

テレビ愛知『工場へ行こうⅢ』で紹介されました

スーパースローなどの特殊カメラを駆使した映像で工場ファンに人気のテレビ番組『工場へ行こうⅢ』。4月5日の放送回で、弊社工場と製品を紹介していただきました。往年のヒット商品である「のび手袋」からロングセラーの「ラブヒール」、また近年開発した「ホイール磨き手袋」やOEM製品であるニットシューズなどが次々に登場。石川メリヤスのモノづくりが伝わる映像になっていました。

TVerでの見逃し配信期間は終わってしまいましたが、ネット連載「読むテレビ愛知」にて放送内容が写真付きの読みやすい記事になっています。ぜひご覧ください。



ディレクターさん、カメラマンさん、音声さんの3名がお越しになり、1日がかりの取材となりました。



「読むテレビ愛知」記事

新製品「魚さばき手袋」を発売中です

魚のヒレや包丁などで手を傷つけない、魚のぬめりで作業効率が落ちないようにしたい——。弊社の魚さばき好き社員が専用の手袋を開発しました。アラミドをステンレス糸に巻き付けた耐切削性に優れた糸で編まれ、出刃包丁の刃が強く当たっても切れにくい手袋です。

表面はあえてザラザラに仕上げてあり、ぬめりの強い魚も楽に固定でき、エラや内臓、皮もつかみやすくなっています。裏面は滑らかで濡れても着脱しやすいのも特徴です。漂白剤を使って洗うこともできるので衛生的。丈夫なので何度も洗って繰り返し使用できます。釣りや料理が好きな方へのプレゼント用としても好評です。



飲食店や鮮魚店のプロにもご愛用いただいています。小売価格は税込み1,650円（1枚売り）です。20枚から10枚単位で卸売りをいたします。



オンラインショップ

Editorial Note

モノとお金の流れが大きく変化していると感じたのは昨年の今ごろです。弊社の看板商品であるラブヒールの売り上げが明らかに鈍り、「何か新しいことをやらなければ」と焦りが募りました。しかし、世の中の流れを見通して自社の施策に反映することは容易ではありません。悩み続けた結果、今年に入って私は開き直りました（半分ヤケ?）。自分たちが「やりたい、やるう!」と思ったことを楽しむ気持ちを忘れずに取り組んでいれば、道は拓けるはず。特集で紹介した「三河軍手®」は、地場産業への私の想いを商品として表しました。社員たちにも続いてほしいと思っています。（大宮裕美）

Credit

編集・執筆・撮影・発行 石川メリヤス有限公司
Art direction & Design 相田貴子 (Consulting Design Tokyo)

2025年8月発行

冊子名『サイコロ』とは

「メーカーの基本は何よりも品質」。
初代社長の想いが込められた創業以来の作業用手袋「サイコロ印」のブランド名から名付けました。
本冊子では、この精神を守りつつ、石川メリヤスの「いま」をお伝えします。

商品問い合わせ&注文先

石川メリヤス有限公司

〒444-0515 愛知県西尾市吉良町富好新田紺屋堀 27-2
TEL 0563-32-0420 FAX 0563-32-3066
E-mail info@ishimeri.com URL https://ishimeri.com